

三上一夫著

公武合体論の研究

越前藩幕末維新史分析

舟沢 茂 樹

幕末維新史は、一般に薩摩・長州を中心とする討幕派と徳川政権の維持をはかりとうとする佐幕派との対決史として理解され、中道的な公武合体派の役割は過少評価されてきた。

公武合体運動は、揺らぎはじめた徳川幕府の威信を朝廷の伝統的權威と結びつけることで回復しようというものでありそれは当然幕政の改革をともなうものであった。そしてその改革の成否こそ徳川

政権の存亡を賭けることになるのだが、この幕政改革に親藩の立場から積極的に関与したのがほかならぬ越前藩であった。越前藩は、公武合体運動の旗手として幕末維新期において終始重要な役割を果たしてきたといえる。本書はその副題が示すように幕末越前藩の動向を精緻に分析したもので、総括的な理論化に成功した最初の労作として高く評価したい。

本書の構成は、第一編「藩政改革路線とその影響」、第二編「公武合体路線とその展開」に大きくわかれていて、第一編は、「藩財政窮迫化の実相」「雄藩推転への胎動」「軍制改革と強兵策の展開」「重商主義的藩論の形成」「民富論的富国策の推進」「統一国家論具体化の画策」の六章からなり、越前藩が深刻な財政危機を克服して雄藩に転じ、將軍継嗣運動を通じて幕政改革にかかわってゆく過程を説明している。第二編は、「文久期幕政改革の推進」「張紙、檄文等に見る尊攘派の動向」「越前藩の挙藩上洛の計画」「第二次征長への反応、その動向」「維

新への公議政体論的対応、その挫折」以上五章にわかれ、文久三年の挙藩上洛計画の挫折・慶応二年の第二次征長への対応を通じ越前藩が公武合体路線から公議政体路線へ推移していく態様を分析している。

公議政体路線は、公武合体運動行き詰りの中から、なお、その精神を継承しながら公議論をもとに漸進的・平和的に統一国家の実現を計ろうというもので、越前藩を中心とした中道的勢力の政策路線として設定された。公議政体路線は、討幕派路線の暴走に歯止めをかけることに重要な役割を果たしたが、公議政体派は本書によって幕末維新史の中に明確に位置づけられたといえる。

本書は、氏の十年におよぶ業績をすぐれた理論構成のもとに集大成したものでその研究の深さは五十頁近い詳細な注によく示されている。巻末の「史料・文献一覧」に掲げている二百点近い関係文献を讀破し、厳正な文献批判を加えてそれを援用していることも本書を説得ある

舟沢 公武合体論の研究―越前藩幕末維新史分析

ものになっている。幕末維新时期における越前藩研究の金字塔として今後の研究に多大の寄与をなすものとして本書を江湖に推奨したい。

(御茶の水書房、二八七ページ)

三八〇〇円)